

## ビヤの凋落

カランサ派はメキシコの内戦で反対派を支持した多くの分派を容認しようとはせず、皆が目指して戦ってきた改革を実行に移そうとしなかったため、全国各地で抵抗が続き、それを押さえるため軍事費が増大し、財政が圧迫され、経済的な回復が遅れていった。カランサの軍事指導者たちは各地で、外国からの進駐軍のように、さらに、独裁者のように振る舞い、チアパスやオアハカでは地主も小作人も一緒になって彼らに抵抗した。アメリカとの冷戦のため、軍需物資調達の道を断たれたカランサは軍事的優位に立てず、敵側も政府を転覆するだけの力がないまま、勢力争いの膠着状態が三年間も続いた。折からの旱魃による被害のため1917と18年、メキシコ全土を飢饉が襲い、栄養不良となった貧困層の間でスペイン風邪やチフスが流行し数千人が犠牲になった。<sup>75</sup>

さらに、1917から20年にかけて、メキシコ革命は最も残酷な局面を迎えた。1916年6月、怪我から回復するなり、パーシングがチワワ北部で釘付けにされ動こうとしないことを知ったビヤは、以前に行ったようにチワワ州の一部を制圧しようと動いた。1916年の暮れ、彼はそれを達成した。しかし11月、チワワ州都を制圧したのが頂点となって、以降再び凋落の一途を辿ることになる。その原因となったのは、チワワ民衆の支持を失ったことにある。

ビヤは1915年以前と異なり、志願兵でなく強制徴兵に頼った。ビヤは報復するとき残忍さを剥き出しにするようになった。しかし、冷血非情なカランサ軍に比べると、まだビヤのスケールは小さかったと言われている。ビヤは捕虜を処刑せず解放したが、カランサ軍はビヤ派の兵士を捕らえると全員射殺し、組織的にチワワの農民を掠奪した。<sup>76</sup>

ビヤは州都を守りきる力がない事は充分に解っていた。しかし、戦わずして逃げるのか、或いは全軍で突撃するのか、1913-15年のビヤであったら後者を選んだはずであったが妥協案を考えた。

独立記念日、処刑前に救出したホセ・イネス・サラサールに三千の兵をつけ、接近してくるムルヒアの大军に対峙させることにした。両軍はチワワ市の南西五十キロにあるオルカシタスで出会った。整然と並んだ巨大な軍勢を見て、サラサールはとても勝ち目はないと思ったが、どんな犠牲を払っても戦うことをビヤから厳命されていた。ビヤ軍は突撃した。何度も押し返されながらも、少し犠牲者を出しただけで引き揚げる事が出来た。ビヤはチワワを撤退した。ムルヒア軍が州都に入るのを見て、ビヤは怒り心頭に達し、代りにトレオンを手に入れることを誓った。<sup>77</sup>

オルカシタスから整然と引き揚げたビヤ軍は簡単にカランサ軍守備隊を追い払い、カマルゴを陥れた。ビヤが町に入るなり、目にいっぱい涙をためた一人の女が、ビヤの前に身を投げ出して、主計官であった夫の助命を哀願した。ビヤは町を攻め取ったジェネラル・ウリベに事の仔細を尋ねると、主計官は既に死んだとウリベは言った。これを聞いた女は狂ったようにビヤに向かって呪いの言葉を投げかけ、「人殺し、何故自分を一緒に殺さなか

った」と大声で怒鳴った。怒りで自制の利かなくなったビヤはピストルを抜いて女を撃った。すると、ビヤを支持する町の住民が言った。カランサ軍が戻ってくると、自分たちがやったと思われ、仕返しを受ける。いっそのことソルダデラ全員を殺したらどうか、と持ちかけた。ビヤはそれに応じた。女たちは引きずり出され、九十人が処刑され、折り重なって斃れた。この事件を契機にビヤはチワワ民衆の支持を急速に失っていくことになった。

78

トレオンはジェネラル・セベリアノ・タラマンテスを隊長とする僅か二千人で守られていた。国防長官オブレゴンがムルヒアに騎兵三千を援軍として派遣することを求めたが、ムルヒアは断った。ビヤ軍は弱体化していて、トレオンを奪回するだけの弾薬も持たないというのがその理由であった。再三にわたる要求を拒否されたオブレゴンはメキシコ中を見回して懸命に援軍を探したが、誰も応じるものはいなかった。1916年12月22日、オブレゴンが危惧したとおり、ビヤ軍はトレオンに突入し市を占領し、タラマンテスは自決した。同僚の死を喜ぶかのように、ムルヒアはタラマンテスを意気地なしで無能と非難した。トレオンでの勝利により、ビヤの威信は増し、彼は大量の軍需物資を手に入れた。多くの者が再びビヤの軍門に志願したが、中には強制的に入れられた者も少なくなかった。ビヤを一目見ようと大勢がホテル・フランシアの前に集まっていた。ビヤはピストルを片手にその群衆に近づき、屈強な若者を見つけると強制入隊させた。過去にそうであったように、慢心したビヤは、今度はムルヒアを打ち破ることが出来ると信じた。ムルヒアのカランサ軍がゆっくりと近づいていた。両軍はヒメネスの近くで衝突することになった、その前夜、パウデリオ・ウリベは夜のうちに密かに千人の部隊をムルヒアの後方へ進め、両方から挟撃することを提案した。相手はタラマンテスの時のように戦意を消失しているので、その必要ないとビヤは斥けた。そのみならず、ビヤはニコラス・フェルナンデス二千の部隊を別の方面に遠征させた。ビヤ軍は完膚なきまでに打ちのめされた。79

ビヤはパラルまで撤退した。パラルにはビヤが州都から持ち出した物資が貨車に積まれて置いてあった。パラルに長くは留まることが出来ない事を知ったビヤはそれらの物資を住民に解放した。ビヤは彼の軍隊を細かく分断し、多くの兵士を故郷に返し、自らは小さな分遣隊を率いてドゥランゴとサカテカスへ出向いて、各地に分散している反政府勢力を統合しようと試みた。灰から立ち上がる不死鳥のように、1917年3月、数千の軍隊を集めて、チワワ州ロサリオの近くでムルヒア軍を迎え撃った。80

ビヤが現れたことを知ったムルヒアは小躍りして喜んだ。ビヤは慎重に戦場を選んで戦いに臨んだ。彼は多くの部隊を丘の影に隠し、騎兵をムルヒアの前へ突撃させ、ムルヒアの歩兵部隊から一斉射撃を受けた。ムルヒアはビヤが又、同じことを繰り返したと、圧倒的勝利を確信して逃げ惑う騎兵を追わず、部隊に休息を命じた。ムルヒアはいつの間にかビヤ軍に周囲を取り囲まれていることに気付かなかった。全面から一斉射撃を受けると、なす術もなく、ムルヒアは二千五百人を失い、自らは間一髪逃れた。失った二千五百人の

内六百人は捕虜になった。それまでビヤは捕虜を皆逃がしてきた。逃れた捕虜はすぐカランサ軍に戻っていた。今度は全員を処刑した。処刑は残忍そのもので、弾を節約するため、五人ずつを一行に並べ頭を撃った。

皆を唾然とさせた勝利の後、ビヤはムルヒアに最後の止めを刺そうとした。しかし、ビヤの内部に異変が起きた。1915年の暮れ、北部師団が解散する間に、ビヤは持っていた武器弾薬をチェバリアの秘密の場所に隠した。チェバリアから武器弾薬を引き出すときには、信頼する数人の側近しか随行を許さなかった。その一人がラファエル・メンドサ少佐であった。メンドサは戦闘中負傷して故郷に戻って療養中、酔っ払ってカランサ派に素性を見破られ、ムルヒアの前に連行された。銃殺隊の前に立たされたメンドサは動転して、命と引き換えにビヤの秘密の武器庫の所在を明かす約束をした。これを知ったビヤは、呆然として涙ぐみ、そして自暴自棄の攻撃を決断した。弾薬は不足していたが、ロサリオの戦いで戦意を失っているムルヒアを叩いて、弾薬を補給しようと考えた。<sup>81</sup>

4月1日、ビヤ軍はチワワ市の南に到着し、大きなキャンプファイヤーを炊いて、攻撃は南から行われると見せかけた。夜陰に乗じて大部分の騎兵を北側に移動させ、未明に攻撃を開始した。ムルヒアはビヤの手に乗らず、ロサリオ戦から立ち直ったカランサ軍との戦いは午後まで続き、ビヤの弾は尽き果てた。ビヤ軍は押し潰され、二百人が捕虜となり、全員が市の目抜き通りアベニダ・コロンの木に吊るされた。ムルヒアはジェネラル・ミゲル・サーベドゥラに、どの木が好きか、と聴いたという。怒り狂ったビヤは、今はカランサ軍に入隊したメンドサを探し回り、行く先々で村人に対して腹癒せの暴行を加えた。

ビヤがアシエンダ・バビコラで、二千の部隊の本営を構えたのを、ムルヒアに密告され、突然襲撃を受けた。それまでは敵が近づいている事は誰かが通告してくれていた。もう誰もビヤに通報するものはいなくなった。数百人が殺され、ビヤも危うく捕らわれるところだった。ビヤ軍は壊滅した。生き延びた部下の中には彼に銃を向けたものまでいた。ビヤは引き籠もって長い間、彼の部隊との接触を断った。その後、長い道のりを辿って、テキサス州プレジディオの対岸にあるオヒナガに現れたビヤは、武器の密輸を試みたが、失敗に終わった。

ビヤはイデオロギー的にも行き詰った。パーシングが引き揚げてから、ビヤは何故カランサと戦うのか、彼の口から一度も説明する事はなかった。ビヤは数百人に落ち込んだビヤ軍を細かく分断して分散させ、ゲリラ戦によって生き延びるしか道は残されていなかった。<sup>82</sup>

パーシングの懲罰軍はメキシコ革命の進展に重大な影響を及ぼした。カランサはアメリカの承認を得ることにより、国内の広い区域を押さえている反乱軍を制圧し、アシエンダ返還プログラムを推し進める計画であった。外交承認により軍需物資の調達ができ、銀行から資金調達が可能であった。懲罰軍がもたらした米墨間の緊張により、ウイルソンはメ

キシコへの軍需物資の輸出を禁止し、銀行の融資を妨げた。そのためメキシコ政府は弱体化し、モレロスのサパタ、チワワのビヤ、規模は小さいながらサン・ルイス・ポトシのセディオ兄弟などの勢力は、カランサがオブレゴンによって転覆される1920年まで生き延び、オブレゴンはそれらの反対勢力と社会的・政治的妥協を強いられたのである。<sup>83</sup>

75. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P618

77. Ibid. P622

77. Ibid. P627

78. Ibid. P628

79. Ibid. P629

80. Ibid. P632

81. Ibid. P633

82. Ibid. P634

83. Ibid. P613